

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏名	劉 爾瑟
学位	博士（中国言語文化学）
学位記番号	甲第146号
学位授与年月日	平成29年3月22日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	中国語と日本語の受身文の対称研究 －中国語教育のため－
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授 高橋弥守彦 （副査）大東文化大学教授 大島 吉郎 （副査）大東文化大学特任教授 呉 麗君 （副査）東洋大学教授 王 学群

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究方法、論文の構成と内容

中日両言語の受身表現は原則として連語レベルと文レベルで対応するが、劉爾瑟氏は受身のむすびつきを作る連語を基礎として文レベルに焦点を当て、受身表現の意味と構造の総合的な研究により、中日両言語の特徴と異同を明らかにし、先行研究ではこれまで解決できなかった点を明らかにしている。

本論文の構成は次の通り（章、節を示し、小節は省略）である。

★目次

序章

研究背景と目的

先行研究

参考文献

第一章 両言語の受身表現の分類

第1節 中国語の受動表現の分類

第2節 日本語の受身表現の分類

言語資料

参考文献

第二章 中国語の“被字句”の構文的特徴

第1節 “被字句”の受け手主語について

第2節 “被字句”における仕手について

言語資料

参考文献

第三章 日本語の受身文の構文的特徴

第1節 日本語の受身文の受け手主語について

第2節 日本語の受身文における仕手について

言語資料

参考文献

第四章 両言語の受身表現の成立に関して

第1節 中国語の“被字句”に用いられる動詞について

第2節 日本語の受身文に用いられる動詞について

言語資料

参考文献

第五章 日中対照から見る中国語の“被字句”の学習難点

第1節 “被字句”における構造助詞“的”を用いる受け手主語の再考

第2節 中国語の所有物受身文と持ち主受身文

第3節 “被…給…”式における“給”の再考

言語資料

参考文献

終章

結論

今後の課題

参考文献

本論文は全七章から構成されている。

序章では、中日両言語の受身表現を研究する目的と先行研究について言及している。

第一章では、先行研究と言語事実とにより、中日両言語における受身表現の従来の分類方法を再検討し、より体系的な分類を示している。中国語の受動表現は受動マーカの有無により“有标记被动句”（「有標記の受動表現」）と“无标记被动句”（「無標記の受動表現」）の二種類に大別し、さらに受動マーカの品詞によって下位分類している。日本語のヴォイスの範疇には自他の対応・受身・使役・自発などの諸形態を含めて検討し、自他の対応は「語彙的ヴォイス」、能動・受身・使役・自発などは「文法的ヴォイス」とし、ヴォイス的対応があるか否かにより、日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」の二種類に大別し、その特徴により前者をさらに四種類に下位分類している。

第二章では、中国語の“被字句”における受け手主語と仕手の実例を調査し、“被字句”の構文的特徴について考察している。“被字句”の受け手主語の特徴についても再検討し、仕手の省略についても検討している。日本語における受け手主語と仕手をめぐって実例調査を行い、受身文の構文的特徴について考察し、受け手主語の特徴について再考している。中日対照の角度から受身表現の仕手が第一人称である場合についても検討している。

第三章では日本語の受身文の構文的特徴について検討している。第一節では受け手主語、第二節では仕手客体についての検討である。

第四章では、動詞を中心に中日両言語の受身表現の成立条件について分析している。第一節では、中国語の“被字句”における動詞について考察し、第二節では、まず日本語における「受身動詞」と「所動詞」について考察している。

第五章では、日本人の中国語学習者のため、“被字句”における若干の難点について検討している。第一節では「“我” + “的” + N」構造をとる受け手主語に絞って調査を行い、第二節では中国語における所有関係を表す受動表現の構文構造を、①所有物受動表現：「NP₂ + “的” + NP₃ + “被” + NP₁ + VP」、②持ち主受動表現：「NP₂ + “被” + NP₁ + VP + NP₃」の2種類に分け、所有物受動表現と持ち主受動表現が互換できない場合を3点（Ⅰ NP₃は行為、動作などの抽象的なモノである場合、Ⅱ 書き換えたあと、余剰の利害の意味合いが生じる場合、Ⅲ 取り付けを表す動詞が用いられる場合）にまとめ、第三節では“被字句”の派生構造である“被…給…”式を取り上げ、“被字句”における“給”の有無、“給”の二重方向性とその条件について、その理由を連語論の観点から明らかにしている。

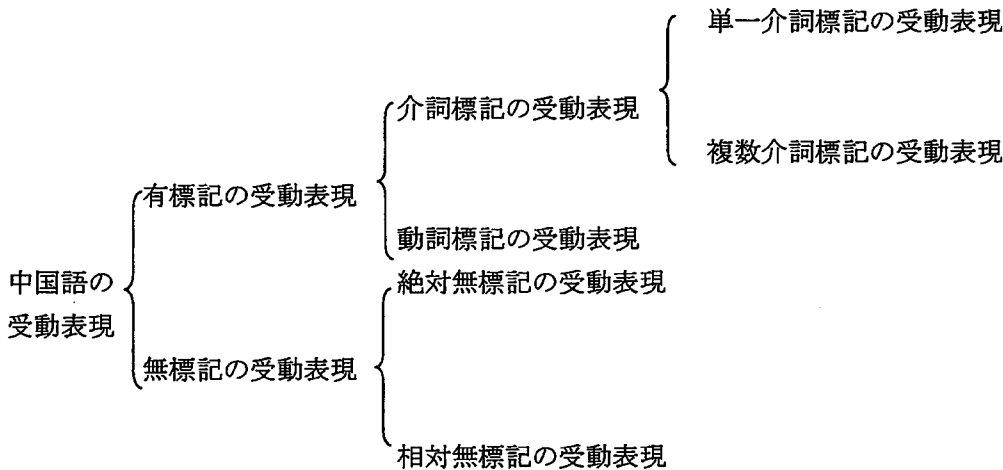
終章では研究の結論と今後の課題について述べている。結論は第一章から第五章までを簡潔に分かり易くまとめている。今後の課題としては本論文執筆上の未解決の問題が挙げられている。それらの問題は、主に関連する各章、各節の「おわりに」のところに記載され、今後の研究課題としている。

3. 研究の成果および評価

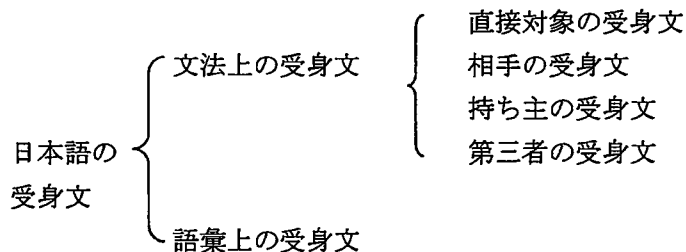
本論文の主要な研究成果は以下の5点にある。

(1) 中日両言語の受身表現を各特徴により体系的に捉え、受身表現の全体像を明らかにしている。

[図1-1] 現代中国語の受動表現



[図1-2] 現代日本語の受身文



(2) 数量詞を修飾語とする名詞連語を用いている実例を挙げ、それらがなぜ主語になれるのかを明らかにしている。これはこれまで非文とされていた。“星期天他收拾厨房时，一只茶杯被他打碎了。”

(成情 2011:162) / 日曜日、彼がキッチンを片づけていた時、茶碗を一つ割ってしまった。(筆者訳)

(3) 中国語の受動表現では“被”の後の仕手は省略される場合があるが、“叫/让”の場合はなぜそれが省略できないのかを明らかにしている。これも先行研究では明らかにされていなかった点である。

(4) 中国語の受動表現に用いられる動詞が結果性を含んでいれば、文“一个人走着，没碰见熟人，也没被碰见。”は成立するが、そうでなければ「動詞+結果を表す成分」で成立することを明らかにした。

(5) 日中対照表現から中国語“被字句”の学習上の難しさを3点（“的”を用いる受け手主語、所有物受動表現と持ち主受動表現、“被…给…”式における“给”）挙げ、それらを理論的に解決している。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上